

つぎの文章を読んで、後の問題に答えましょう。

日曜日の午後、ぼくは弟の大地としようぎをさした。大地は二年生で、しようぎをおぼえたのは、つい一か月前のことだ。ぼくは、手かげんをしてやるつもりでいた。

ところが、気がつくと、ぼくの王様は大地のこまにかこまれていた。

「王手。」

大地がうれしそうに言った。にげ道をさがしたが、どこにもない。ぼくは負けたのだ。

「今のは、わざと負けてやったんだよ。」

ぼくはそう言って、ばんの上のこまをぐしゃぐしゃにした。本当は、くやしくて顔が熱かった。

その夜、大地の部屋の前を通ると、中から小さな声が聞こえた。そつとのぞくと、大地がしようぎばんを前に、一人でこまをならべている。

「お兄ちゃんは、ここで角を動かして……。」

大地がならべていたのは、ぼくがいつも使うせめ方だった。ぼくがさすのを横で見、ずっとおぼえていたのだ。大地は、ぼくのように強くなりたくて、毎日こっそり練習していたのかもしれない。

ぼくは、昼間の自分がはずかしくなった。

次の日、ぼくは大地に声をかけた。

「もう一回やろう。今度は、本気でな。」

大地は目をかがやかせて、しようぎばんをかかえて走ってきた。

(この問題のための書き下ろし)

問一 ぼくは、はじめ、どんなつもりでしようぎをさしていましたか。「つもり」につづくように、本文から十字まで書きぬきましょう。

問二 「今のは、わざと負けてやったんだよ」と言ったときのぼくの気持ちとして、いちばんあうものを、ア～ウから一つえらびましょう。

ア 大地が強くなったので、うれしい。

イ 弟に負けたのがくやしく、それをかくしたい。

ウ しようぎにあきたので、早くやめたい。

--

問三 「昼間の自分がはずかしくなった」とありますが、それはなぜですか。四十五字まで書きましょう。

問四 物語の最後で、ぼくの大地への気持ちはどう変わりましたか。いちばんあうものを、ア～ウから一つえらびましょう。

ア 大地に勝てないので、今度は手かげんしてもらおうと思うようになった。

イ しようぎがきらいになり、もうやめようと思うようになった。

ウ 弟を下に見ていたが、一人のあい手として本気で向き合おうと思うようになった。

--